国立民族学博物館

月刊みんぱく

2020 1月号

特集

世界の縁起モノ

年初めの珍客　八木百合子
インドの笑う門にも「ラフィング・ブッダ」　福内千絵
神と人と二股大根　島谷武史
黄土高原に咲く紅紙の花　丹羽朋子
見せて魅せるトルコの祝儀　田村うらら
赤くて丸いクリスマスのチーズ　古沢ゆりあ
嫉妬にはきっと尻尾が効く　二ツ山達朗

新米と美酒

新谷 尚紀

フィールドは、いつも刺激と感動に満ちている。二〇一九年の初秋、高知県中土佐町の久礼八幡宮の御神穀祭を見学する機会があった。まだ蒸し暑い中、旧暦八月一日の新月から一五日の満月までの長い期間の祭礼次第をよく残している古式豊かな祭りである。とくに注目されたのは、頭屋と頭人が奉納する新米を炊いたご飯に、佾と呼ばれる神聖な少女が神前で生麹を揉みこんで一夜酒を醸す神事であった。

日本の神祭りの基本が稲の祭りであることは、新嘗祭や践祚大嘗祭をみれば明らかであろう。しかし、日本の稲作の起源からみれば、紀元前一〇世紀半ばに九州北部で始まった稲作が関東地方にまで広まるのは紀元前三世紀頃、その間、約六五〇年もかかった。ただし、稲作が定着した社会では大きな変化が起こった。三世紀半ば、その九州から東北地方南部までの範囲で前方後円墳が一斉に築造され始めたのである。稲作の定着が古代王権を誕生させたのである。

六五〇年もの長きにわたり人びとが嫌悪し抵抗し続けたのに、稲作が定着していったのはなぜか。その謎を解くカギは、古代律令制下の中臣祝詞と春時祭田条の記事にある。収穫した稲の初穂を天皇と神に献納し、農民たちも白飯を食べ白酒を飲んで酔いしれ喜びを分かち合おうというのであった。白飯と白酒の美味に魅了された人たちが、その味が忘れられずに稲作に従事していった姿が想像される。

闇夜の中を、大たいまつの火とともに運ばれてきた御神穀が、燃えさかるたいまつの火の粉が散る中で神前へと運び込まれ、その火の下で少女によって一夜酒が醸され本殿の奥深くに奉納される。その二日後に直会になぞらえて一口味わったその美味は、私は一生忘れない。稲の収穫を神とともに白飯と白酒の美味で祝い合う基本が、この御神穀祭には保存伝承されている。

古伝祭といえば、島根県松江市の佐太神社の御座替神事でも、火鑽杵と火鑽臼を用いる発火法の古式が伝承されている。長い歴史の変遷の中にも、そのように保存伝承されるものがあるのはなぜか。それは、伝承が世代をつなぐ人たちにとっての存在証明だからである。日本創生の民俗学は folklore ではない。伝承 traditions と変遷 transitions の動態を研究する独創的な伝承学 the study of traditions : traditionology なのである。

プロフィール
1948年広島県生まれ。国立歴史民俗博物館教授、国立総合研究大学院大学教授等を経て、現在、両名誉教授。國學院大學大学院客員教授。柳田國男と折口信夫の著作を読み込み、歴史科学としての「民俗伝承学」を提唱し実践している。著書に『神々の原像』、『民俗学とは何か』（いずれも吉川弘文館）、『神道入門』（筑摩書房）ほか多数。

月刊 みんぱく

1月号目次

1 エッセイ 千字文
新米と美酒
新谷 尚紀

特集 世界の縁起モノ

2 年初めの珍客
八木 百合子

4 インドの笑う門にも「ラフィング・ブッダ」
福内 千絵

5 神と人と二股大根
鳥谷 武史

6 黄土高原に咲く紅紙の花
丹羽 朋子

7 見せて魅せるトルコの祝儀
田村 うらら

8 赤くて丸いクリスマスのチーズ
古沢 ゆりあ

9 嫉妬にはきっと尻尾が効く
二ツ山 達朗

10 ○○してみました世界のフィールド
回族の宣教活動に参加する
奈良 雅史

12 みんぱく Information

14 想像界の生物相
チベットの占術ダイアグラム
村上 大輔

16 みんぱく回遊
茶の旅
韓 敏

18 シネ倶楽部 M
月経のタブーに挑む、心優しきヒーロー
――「パッドマン ――5 億人の女性を救った男」
松尾 瑞穂

20 ことばの迷い道
ゴム時間の危機
小野 林太郎

21 次号予告・編集後記

特集

世界の縁起モノ

日本をはじめ、世界各地で見られる縁起をかつぐ習慣。悪いものを遠ざけ、よい方向へと導いてくれるのが縁起モノである。人びとの願いは、モノ・出来事とどのようにつながっているのだろうか。

正月に限らず、世界には一年を通じてさまざまな縁起モノ（物ノ者）が見られる。結婚などの慶事から日常生活にいたるまで、多様な場面に見られる縁起モノをとおして、各地の信仰の世界をのぞいてみたい。

年初めの珍客

八木百合子 民博 学術資源研究開発センター

年末から年始にかけては、一年のなかでも特に多くの縁起物を目にする時期である。門松、破魔矢、お節料理などは、その代表格であるが、縁起かつぎとしてこの時期に登場するのは、飾り物や食べ物ばかりではない。新年になると、神々や異形の姿で人里にあらわれる縁起のいい者たちもいる。

そもそも正月とは、歳神様を迎える日である。一年の初めに、その年の幸運を運んできてくれるのが歳神だ。年末に家の大掃除をしたり、注連飾りを付けたりするのも、家々に歳神様を迎えるためである。日本では古来より、異郷の地からやってくる神を歓待することで、豊穣や祝福がもたらされると信じられてきた。

異界から年に一度来訪する神々や珍客を歓待する風習は、日本各地に伝わる民俗行事のなかにもしばしば見られる。男鹿のナマハゲ（秋田）や下甑島のトシドン（鹿児島）は、そうした「まれびと」の典型であり、大晦日に人里を訪れ、新年を祝福して、家々をめぐり歩くことで知られる。こうした風習には、今も息づくそれぞれの土地の人びとの信仰のかたちが見てとれよう。

アンデスの珍客

わたしが調査をしている南米ペルーにも、正月に独特の格好をした珍客が訪れる地域がある。アンデスの山々に囲まれたペルー中部のワンカヨ地方は、新年になると、尖った鼻が特徴的な仮面をつけた一団が、村々を賑わすことで有名だ。彼らはワコンとよばれ、楽隊が奏でる音楽や小太鼓のリズムに合わせて、村の通りを練り歩きながらやってくる。

ワコンの全身像。麦わら帽子とマントをつけ、手には鞭をもっている（2019年）

顔には大きな鉤鼻と深い皺が刻まれ、その姿は古老であるとも、コンドルであるともいわれる。実際、ワコンは腰の曲がった老人のように小股で歩く素振りを見せたり、長いマントを翼のごとく広げたりしながら、人びとの前で踊り回る。また、一説によれば、ワコンはこの地域に伝わる神話に登場する、コンという名の神に由来するともいわれ、ワコンが登場する踊りの歴史はスペインによる植民地化以前の時代に遡るとも考えられている。

ワコンがやってくる！

一年の始まりに、村人たちのおこないを正すのがワコンの役目である。ワコンは、村にやってくると、手にもった鞭を振りかざし、悪いやつはいないか探し歩く。そして、怠け者や素行の悪い人、うそつきや盗みを働いた人、不祥事を起こした村人を見つけては、鞭で叩いて戒める。

ワコンの古いタイプの仮面。頬骨が出て、歯が折れていて、老人の表情を模しているのが特徴である

年初めの三日間、ワコンは村の最高権力者という立場にあり、誰もワコンには逆らえないのだ。

それだけではない。ワコンは村の家々を見て回り、きちんと掃除してあるかなどを確認し、住民の生活を正していく。「ワコンがやってくる！」と聞いて、急いで家の片づけに取り掛かる人も少なくない。人びとにとってワコンは、畏怖する存在であると同時に、村に秩序をもたらす大切な存在でもあり、何よりありがたい存在なのである。だからこそ、ワコンの姿を一目見ようと、村外から見物人が集まることも多い。なかには、自ら好んでワコンに鞭で叩いてもらう人もいる。ワコンの鞭に与った人は、縁起がいいともいわれるからだ。

ワコンの今昔

現在、ワコンがあらわれるのは暦の上での一年の始まりである。しかし、もともとはトウモロコシの播種と収穫に入る時期、つまりそれぞれ雨季と乾季の始まりという、アンデスの農民にとって重要なふたつの時節にやってくるものであった。その来訪は、豊作の縁起を祝う人びとの信仰と結びついていたのだ。それがいつしか、今日の日付に定められたようである。だが、今でもワコンは、アンデス農村に暮らす人びとの社会生活に欠かせない、秩序をもたらす大切な存在にちがいない。

村の通りを歩くワコンの一団（2008年）©flickr/destacadosdelaño (CC BY-SA 2.0)

インドの笑う門にも『ラフィング・ブッダ』

福内 千絵
大阪芸術大学非常勤講師

南インドのティルパトゥルという村で立ち寄ったコーヒースタンド。一息ついていると、見覚えのある神様の姿が目に飛び込んできた。ズタ袋に太鼓腹、そして福々しい笑顔。日本では七福神でおなじみの「布袋さま」がカウンターに鎮座していた。店の人によると、これは「ラフィング・ブッダ（笑うブッダ）」という名で、最近人気の縁起物のようだ。店先に置いておくと幸運や金運をよび込むとか。ここでは甘い香りのジャスミンの花輪まで捧げられており、布袋さまがインド式の歓待を受けているようで、微笑ましい（表紙参照）。

ヒンドゥー寺院のお下がりとして並べられているラフィング・ブッダの塑像。下の写真の像は子どもと戯れる姿をしている（南インド・コタマンガラム、2018年）

風水の広まりとともに

ラフィング・ブッダの来歴をたどってみると、風水の流行に行き当たった。デリーやムンバイなどの都市部では二〇〇〇年代に風水ビジネスが展開し、布袋さまことラフィング・ブッダの塑像はイチオシの開運商品とされたようだ。その多くが中国製の大量生産品で、雑貨店や風水専門店で販売されてきたが、現在では天然素材による国内製を売りにする店もある。また、オンライン販売の際には、風水の「よいエネルギー」を賦活して発送するサービスを謳う店も存在する。販売される塑像の姿は多様で、満面の笑みと太鼓腹を基調として、銭蛙にまたがる姿や子どもたちと戯れる姿などがあり、それぞれ金運アップ、家庭円満、子宝祈願などの人びとの願いに対応した姿をしている。

風水専門店の陳列棚。他の風水関連の商品とともに、ラフィング・ブッダの塑像が飾られている（西インド・ムンバイ、2019年）

商店や住居の入り口で見かけるその姿も主の願いが反映され、ひととおりではないのだろう。

ヒンドゥー世界のなかで

こうした風水のあり方に対しては「不幸せな人をターゲットにした金儲けに過ぎないよ」との冷ややかな声もある。一方で、ラフィング・ブッダをめぐってのあらたな熱い動きがあることもたしかだ。南インドにある、とある村落のヒンドゥー寺院では、小ぶりの塑像が売店の土産物や参拝者へのお下がりにまで用いられるようになった。また、財宝神クベーラを祀るヒンドゥー寺院では、ラフィング・ブッダ像が併せて安置され信仰を集めている。その屈託のない笑顔がそうさせるのか、縁起物のラフィング・ブッダは着実にヒンドゥー世界のふところにも入り込みつつあるようだ。

神と人と二股大根

鳥谷 武史
金沢大学客員研究員

増殖する二股大根のイメージ

目の前にはうず高く積まれた大根、だがここは市場ではない。台東区の待乳山聖天には絶え間なく大根が奉納されていく。参詣者は聖天尊のご利益を求めて足を運ぶのだ。聖天とは、またの名を歓喜天という仏教の神で、象の頭に人間の体という姿であらわされる。しかし、たいていは秘仏とされ、その姿を拝むことはできない。

聖天と大根の繋がりは一二世紀の経典にも見いだすことができ、いつごろから盛んになったのか定かではないが、二股大根が聖天のご利益をあらわすシンボルとして扱われるようになる。

西養寺聖天堂の絵馬（上）と祭壇（左）
（撮影：吉岡由哲、2019年）

金沢市の西養寺はその一例といえよう。二股大根をモチーフとした什物類が置かれた聖天堂の絵馬には、祖母・母・子と見られる人物が描かれている。彼らの合掌する先には、巨大な二股大根の絵馬と供物の二股大根。もはや描かれた内容だけでは、象頭人身の神など思いもおよばないだろう。

聖天のご利益を求める人びとの願いは、姿を見ることすら憚られる神のシンボルとして、誰しもが思い浮かべられる二股大根を描かせ続けた。秘仏という扱いが、代理イメージの生産に拍車をかけたのである。

神様の食べ物

東北地方では二股大根にまつわる次のような昔話が語られている。腹を痛めた大黒天が人間に大根を求めるが、人間は事情があって一本も譲れない。そこで二股大根の片方を折って渡したところ、たちまち痛みがおさまったという筋の話で、現在も大黒天に二股大根を供える風習がある。

また、石川県能登地域では、田の神をまつるアエノコト神事があり、神に捧げる饗膳には二股大根が置かれる。神事をおこなう方によれば、依り代などではなく、あくまで神の食事なのだという。

二股大根は、祭壇の奥、厨子のなかにおわす聖天に代わり、あたかも代理人のように表舞台へ引き出されて、あらゆるものに縁起モノとして刻まれてきた。他方、いにしえより食卓に供されてきた大根は、人と神とを「食」というキーワードで繋げるモノでもあったのである。

アエノコト神事の饗膳（2014年）

黄土高原に咲く紅紙の花

丹羽朋子　国際ファッション専門職大学講師

上：春節の窰洞の入り口。同じ紅紙を用いて、門戸にはめでたい対句の書かれた春聯（しゅんれん）、窓には窓花が貼られる
下：格子窓に貼られた、十二支の動物や吉祥図案の窓花

格子窓に咲く紙の花

中国各地には古来より、吉祥図案を切り出す剪紙（切り紙）が伝わる。陝北（陝西省北部）では春節（旧正月）前になると、家の女性たちが鋏を手に「窓花（まどはな）」とよばれる剪紙作りに精を出す。ここ黄土高原の伝統的穴居「窰洞」には唯一の採光部として格子窓があり、そこには新年を寿ぐさまざまな図案の窓花が貼られて、日が差し込むとステンドグラスのように美しい影を室内に落とす。

春節前、大掃除を済ませて整えられた窰洞内外が真っ赤な窓花で彩られると、冬枯れた山村はにわかに華やぎを取り戻す。だがこの窓花、陽光や風に晒されるとすぐに色褪せ、破れて朽ちゆく運命にある。ところが実際に現地で暮らしてみると、そのモノとしての脆さがむしろ、障子紙の貼り替えに乗じて年毎に新調される契機を生むことに気づかされる。使い捨てされては何度も生まれ変わることで、そのかたちの意味を、忘れかけていた人びとに思い起こさせる。

ことばのように、かたちを使う

文字を解さない年配の陝北女性たちは、祈願や想いを託す身近な媒体として剪紙を用いてきた。婚礼の剪紙「喜花」はその代表格。当日はありとあらゆる場面が夫婦円満と子宝を祈念する吉祥の喜花で埋め尽くされる。例えば牡丹と石榴。参列した老婆いわく、「牡丹は女、乗っかる石榴は男。石榴は種子でいっぱいだ。若い嫁も窓花を見れば、やるべきことがわかるってもんさ」。絵解きのような図案はさらに、儀礼の文言や会話の常套句と合わさってより豊かなメッセージを放つ。ことばとかたちが響き合う、縁起モノとしての剪紙のなまなましい姿がそこにはある。

婚礼では窓や壁に加え、嫁入り道具、新郎新婦が契りの儀式でかじる饅頭までもが喜花で飾られる
（写真はすべて2009年に撮影）

陝北方言では切り紙を「鉸花」といい、「花」とは文様や美しいかたちをあらわす。「娘産むなら器用に育てろ、石榴も牡丹も冒鉸できる」。これは婚礼の唱え文句で、「冒鉸」とは下描きなしに自在に図案を切り出す技を指す。先祖伝来の「かたちのことば」を操り、想像力豊かにあらたな意匠へと昇華させる冒鉸の名人は称賛を集め、他の女性たちはこぞってその剪紙を型紙に欲しがる。だから一枚の剪紙の命は儚くとも、そのかたちは驚くほど長生きだ。模倣やアレンジが繰り返され、ときに世代を超えて、次なる変奏を生むイメージの源泉となりゆく。近年は窰洞から平屋や集合住宅への住み替えが進み、装飾品として剪紙の役目は転機を迎えているが、子や家族の幸せを願う想いは今もむかしも同じ。黄色い大地に生きる人びとの想いを映す紙の花はなおもしぶとく生き続けるに違いない。

見せて魅せるトルコの祝儀

田村うらら　金沢大学准教授

踊りながら祝儀を贈られる花嫁と花婿（ムーラ県、2009年）

「おめでたい」といえば、どんな機会が思い浮かぶだろうか？　結婚と出産は、その代表だろう。身近な人の結婚や出産を喜び、贈り物や祝儀を渡して祝う。贈り物はラッピングし、祝儀は中袋や水引飾りのある祝儀袋に入れるのが日本でのマナーである。

さて、わたしが住んでいたトルコにも、贈り物を「包む文化」がたしかにある。たとえ家にあった物のちょっとしたおすそわけでも、包装紙がなければ新聞紙などででも、とにかく包んで渡すのが習わしだ。ところが、である。トルコで結婚式に参列してみると、祝儀にはまったく別のルールが適用されていることに驚く。

祝儀の贈り方

都市部でも田舎でも、結婚の祝宴はたくさんの招待客を招いて盛大におこなわれる。客は数百人、多いときには千人を超えることも稀ではない。ただ、日本のように席次が決まった着席スタイルではなく、出入り自由の踊り主体の祝宴が主流である。

さて、新郎新婦とその友人たち、近親者たちが次々に踊りを披露して宴もたけなわとなったところ、花嫁と花婿の首に幅広の長いリボンがかけられる。そこに客が長蛇の列を作り、一人ずつ祝儀を留めてゆく。祝儀は紙幣か金貨、ブレスレットなどの金製品である。

「共和国金貨」とよばれる、建国の父ケマル・アタテュルクの横顔入りの金貨。90年代に高インフレに苦しんだ記憶もあり、金はもっともふさわしい祝儀とされる（イスタンブール、グランドバザールの貴金属店にて、2019年）

数多の祝福の可視化

結婚式の祝儀はこのように、多くの招待客の面前で、本人たちの衣装に、裸のまま虫ピンで留めるのが贈り方の王道である。衆目のなか、一人一人が主役とキスと挨拶を交わしてお札や金製品を重ねて付けてゆく。ひととおり終わると、新郎新婦は鱗のように重ねられたお札をひらひらとはためかせ、金の飾りを煌めかせながら、皆の前でくるくると踊って披露する。

トルコでは結婚式に加えて、イスラームに則っておこなわれる男児の割礼式でも同様に祝儀が贈られ披露される。贈る金額自体はさほど重視されない。とにかく視覚的に主役が祝儀を身体じゅうにまとう姿を出現させ、それを皆で「見る」のが重要らしい。その姿は参列者一人一人の祝福の集積そのもの。めでたいのである。

割礼式にて、参列者から紙幣を贈られた主役の兄弟
（イズミル市、2003年）

赤くて丸いクリスマスのチーズ

古沢ゆりあ　滋賀県立近代美術館学芸員

フィリピンのケソ・デ・ボラ

　フィリピン共和国では、キリスト教徒が人口の多数を占め、クリスマスが盛大に祝われる。「世界一クリスマスが長い国」ともいわれ、早いところでは九月からクリスマスソングを流し始める。お祝いの中心はもちろんイブ（前夜）とクリスマス当日だが、年が明けても一月六日の公現祭、ときには二月二日の聖燭祭までクリスマスの飾りが残される。

　この時期の風物詩ともいえる食べ物にケソ・デ・ボラというチーズがある。スペイン語で「ボールのチーズ」を意味し、真っ赤な蝋で包まれた球体のチーズである。クリスマスが近くなると、大小さまざまなものが食料品店で大量に積み上げられる。保存のために塩をきかせてあるため塩辛いが、薄切りで食べたり、細かくして料理やお菓子に使われる。例えば、ビビンカという米粉とココナツミルクの蒸しケーキに入れたりトッピングしたりする。

クリスマスカラーのパッケージと、切ったケソ・デ・ボラ（2011年）

チーズを入れることもある蒸しケーキ、ビビンカ（マニラ、2015年）

　クリスマスにケソ・デ・ボラを食べる習慣は、赤いもの、丸いものは幸運をもたらすと信じる中国系の人たちの考えが、西洋由来の赤くて丸いチーズに合わさってできたものだと言う人がいる。交易関係のなかでむかしから中国系の人が多く住み、スペイン植民地時代には西洋の影響を受けたフィリピンの歴史と文化がよくあらわれた食べ物ということになる。現在、これらのチーズは、オランダなどから輸入されているということだ。フィリピンでは、麺類も祝いの席でよく出され、例えば誕生日にスパゲティを食べるという習慣がある。これも、長い麺と長寿を結びつける東洋の伝統と、西洋の食文化が融合したものといわれている。

花火と爆音で悪運を祓う

　年末年始もまだクリスマスシーズンのうちだが、新年を迎えるには、それならではのお祝いもある。例えば、年越しの花火。熱帯らしく暑いフィリピンの大晦日、朝からあちこちで爆竹や笛が断続的に鳴り始め、暗くなると盛大に爆竹や花火が鳴らされ、日付が変わるころには最高潮に達する。大都会マニラでは、太鼓を連打するかのような轟音と閃光で街全体がとどろき振動するほどの迫力である。大きな音は悪運を追い払うと考えられているからだという。

　幸運をよぶチーズや悪運を祓う花火からは、来るべき年を良きものとして迎えたいという思いが感じられる。

街が花火の音と閃光と煙に包まれる年越しの瞬間（マニラ、2015年）

嫉妬にはきっと尻尾が効く

二ツ山達朗　平安女学院大学准教授

ガフサ県の精肉店。4つの魚装飾具が飾られているのが見える（2014年）

邪視を防ぐもの

　チュニジアでは嫉妬や妬みによる視線が、病気や怪我、流産などの災いを引き起こすとされている。アラビア語では「アイン・アル・ハスード（妬む者の目）」などとよばれ、北アフリカ、中東、南アジアなど広範囲に同様の慣習が見られる。特に子どもや妊婦、美しいものなどがその被害にあいやすいとされるが、人びとはさまざまなものを用いることで、邪視から身を守ってきた。

　そのひとつが、目のモチーフを身に着け、嫉妬の視線を目によってはね返す術である。目玉模様のキーホルダーやステッカー、目の模様に見える孔雀の羽などが好まれる。もうひとつが縁起物や護符を飾ったり身に着ける術である。例えばクルアーンの章句がしるされたもの、蹄鉄、珊瑚、タツノオトシゴ、亀の甲羅、カメレオン、手のモチーフ、そして魚である。

チュニスで購入した魚の尻尾とカメレオンのパッケージの薫香（2019年）

魚がもたらす縁起

　魚はフェニキア時代、ローマ時代から北アフリカの人びとの生活に浸透し、肥沃さや多産を象徴するものとされてきた。現代のチュニジアでは、邪視から身を守るものとして、魚のモチーフが玄関に描かれたり、金細工や刺繍のモチーフになり人びとの衣服を彩ったりしている。モチーフのみならず、本物の魚の尻尾も飾られる。尻尾は加工された市販のものもあるが、市場で譲り受けたものを塩や防腐剤に浸して乾燥させ、手作りする人もいる。いずれの場合も、居室内や車のバンパー、バックミラーなどに取り付けられることが多い。

　このような慣習が、厳格な一神教と思われがちなイスラームの世界にもあることを、意外に感じる読者もいるかもしれない。実際に、これらの慣習はイスラームとは関係ないと、否定的なとらえ方をするムスリムもいる。しかし、邪視に関する記述は、クルアーンにもしばしば登場し（例えば黎明章など）、イスラームの実践の一部ととらえているムスリムも多くいる。崇拝の対象は唯一神のみかもしれないが、唯一神を崇拝するために多様なものが用いられているとも理解できるのではなかろうか。

ジェルバ島の嫁入り道具入れ。魚の絵が嫁入り道具を邪視から守る（2008年）

○○してみました世界のフィールド

回族の宣教活動に参加する

奈良 雅史
民博 超域フィールド科学研究部

イスラームを宣教してみました

ムスリムの前でイスラームについて語る筆者
（撮影：マー・ヤーディ、2010 年）

中国の少数民族・回族とイスラームを調査していた筆者が、現地で思いがけずイスラームを「宣教」することになった。自身はムスリムでないため困惑しながらも、地元の人びとを前に語り始める。そんな貴重な経験から見えてきたものとは。

中国
雲南省

イスラームを「宣教」する

もう一〇年ほど前になるが、わたしはイスラームを「宣教」したことがある。ただし、わたしは目下のところムスリムではない。

わたしは中国西南部・雲南省でイスラーム系少数民族・回族たちが漢族を中心とする非ムスリムと隣り合いながら、いかにイスラームを実践してきたのかを調査してきた。中国では約一〇〇〇万人の回族が全国に分散して各地でモスクを中心としたコミュニティを形成して暮らしてきた。彼らのあいだでは、改革・開放政策以降、イスラーム復興が急速に進展し、宗教活動が活発化した。そのひとつに宣教活動がある。この活動はアラビア語でダアワ（イスラームへの呼びかけ）とよばれるもので、非ムスリムへの宣教だけではなく、ムスリム同士で信仰心を高め合うことも含まれる。わたしが参加したのは後者の活動だ。

二〇一〇年一月、わたしは回族たちによる宣教活動に同行させてもらった。その際、活動参加者の回族たちから活動先のモスクで、そこに集まった三〇名ほどの地元の回族たちを前にイスラームについて話すよう求められた。しかし、ムスリムでもないわたしが宣教の場でムスリムたちに何を話せるというのか。そう彼らに率直に伝えたが、「いいからいいから、みんな喜ぶから何でも良いから話してくれ」と譲らない。仕方なくしどろもどろになりながら日本におけるイスラームの現状を紹介し、中国国外での回族に関する研究の高まりについて話した。ムスリムではないわたしが宣教活動においてムスリムを前にイスラームについて語る。これは一見するととても奇妙な状況だ。

中国の伝統的なモスク（2010 年）

回族を取り巻く状況の変化

一九八〇年代以降のイスラーム復興にともない、信仰に目覚めてより一層敬虔になる回族があらわれるようになった。彼らはイスラームについて自ら学び、意識的にイスラームを実践することを重んじる。例えば、礼拝のとき、コーランを唱えなくてはならないが、彼らはただ漫然と唱えるだけではなく、そのコーランの一節一節が何を意味するのかを理解しようとする。

一方で、特に都市部では改革・開放以降の再開発にともない、回族はモスクの周辺に集住することができなくなり、彼らの日常生活においてモスクが疎遠なものとなっていった。その結果、回族のあいだでイスラームが重視されなくなる傾向が見られるようになった。わたしのある友人は、「親が（学校での）勉強の妨げになると言ってモスクに行かせてくれなかった」と語った。回族のあいだで宗教教育よりも学校教育を通じて立身出世を果たすことが望まれるようになってきたためだ。

これらの現象は回族社会においてイスラーム復興と世俗化が同時に進展し、二極化してきたことを示しているように見える。しかし、必ずしもそうではなく、これらは密接に結びついている。以下で述べるように、イスラーム復興と世俗化が不可分であるがゆえに、わたしはイスラームを「宣教」することとなったのだ。

ラマダーン期間中の日没後の食事（2009 年）

宗教的権威の在処

回族は中東や中央アジア出身の外来ムスリムを出自にもつ人びとだとされるが、現在はそのほとんどが中国語を母語としており、アラビア語を話すことができる者は稀だ。そのため、彼らは中国語訳の文献を通じてイスラームを学ぶ。それにはそれなりの中国語の読解能力が求められる。こうした中国語の読解能力は学校教育を通じて培われる。よって、高学歴者はより深くイスラームを理解できる。現地の回族のあいだではこのように考えられる傾向にある。つまり、世俗的な学校教育での学歴の高い者が宗教的権威をも発揮しうる状況にあるのだ。実際、調査地での宣教活動のおもな担い手は回族の大学生たちであった。そして、わたしは当時、博士課程の大学院生であった。こうして冒頭の事態に至るわけである。

現在、わたしはときどきシンポジウムなどにおいて中国語で研究発表をすることがある。うまく話せるかいつも不安になる。そんなとき、何の準備もなく拙い中国語でムスリムの前でイスラームについて話さなくてはならなかったことを思い出す。そして「あのときに比べたら大丈夫」と自分に言い聞かせている。

ラマダーン明けの祭りでの礼拝（2008 年）

特別展

「先住民の宝」

世界には、「先住民」と呼ばれる人たちがいます。先住民とはだれか？「宝」にこめられた思いとは何なのか？本展覧会では、日本のアイヌをはじめ、北欧、カナダ、オーストラリア、中南米、アフリカ、台湾、ネパール、マレーシアなど、世界各地に暮らすそれぞれの「先住民」が大切にしている「宝」を展示します。

銅板紋章 Gerry Marks作／ハイダ（カナダ）

会期　3月19日（木）～6月2日（火）
会場　特別展示館

コレクション展示

「朝枝利男の見たガラパゴス——1930年代の博物学調査と展示」

アメリカの学芸員で写真家の朝枝利男が1930年代に撮影したガラパゴスの風景について、彼の描いた美しい魚の水彩画とともに紹介します。

ガラパゴスでパイプをふかす朝枝利男

会期　1月16日（木）～3月24日（火）
会場　本館企画展示場の一部

みんぱく映画会

「廻り神楽」

岩手県三陸海岸を舞台に、340年以上にわたり、毎年、巡業の旅をする黒森神楽。大津波を生き抜いた神楽と、その地に暮らす人びとの力強さを描いたドキュメンタリーです。

亡き人を供養する神楽念仏
© ヴィジュアルフォークロア

日時　2月11日（火・祝）13時30分～16時（開場13時）
会場　本館講堂
司会　林勲男（本館 教授）
トークセッション
　遠藤協（共同監督／プロデューサー）
　神田より子（敬和学園大学 名誉教授）
※申込不要、要展示観覧券（定員450名）
※参加券を11時からインフォメーション前（本館1階）にて配布します。

みんぱくワークショップ

「飛び出す獅子舞 福ぬりえ——つくって かざって 厄ばらい！」

日時　1月11日（土）、12日（日）10時～17時（受付終了16時30分）
会場　本館1階エントランスホール
対象　全年齢
※申込不要、参加無料、定員各日150名

「ハンティの文様の世界——フェルトのコースターづくり」

西シベリアに居住するハンティの人びとは、身の回りの動物や植物、精霊などをあらわした文様で衣服や生活小物を飾ります。ハンティの文様を学んで、フェルトのコースターづくりに挑戦しましょう。

日時　1月19日（日）①10時30分～12時②13時～14時30分
会場　本館2階 第3セミナー室
講師　大石侑香（本館 特任助教）
対象　小学4年生以上
※要事前申込（先着順）、定員各回16名、参加費500円
※定員に達し次第受付終了
※くわしくはみんぱくホームページをご覧ください。

みんぱく映画会・みんぱく映像民族誌シアター

本館オリジナルの映像作品である「みんぱく映像民族誌」シリーズのなかから選定した作品を上映後、監修者によるトークをおこないます。

会場　淀川文化創造館 シアターセブン（定員各回60名、当日先着順）
※申込不要、参加無料

「バイラヴ仮面舞踊」

日時　1月11日（土）14時～16時（開場13時30分）
司会　福岡正太（本館 准教授）
解説　南真木人（本館 准教授）

「ネパールの楽師ガンダルバ」

日時　1月25日（土）13時30分～16時（開場13時）
司会　福岡正太（本館 准教授）
解説　南真木人（本館 准教授）

みんぱくミュージアムパートナーズのワークショップ

「みんぱくで、こけしのポストカードをつくろう！」

日時　1月12日（日）10時～16時
会場　本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料（要展示観覧券）、随時受付

「干支の動物で絵馬を作ろう」

日時　1月13日（月・祝）10時30分～16時30分（15時30分受付終了）
会場　本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料（要展示観覧券）、定員先着80名

「西アフリカのおはなし会」

日時　1月13日（月・祝）①11時30分～12時②13時30分～14時
会場　本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料

点字体験ワークショップ

目で読む文字から手で読む文字へ、点字で異文化コミュニケーション！ 点字体験ワークショップを開催します。

日時　1月11日（土）12時～15時30分
会場　本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料

公開講演会

「ふたつの文化を生きる——ドイツのトルコ系移民から私たちのこれからを考える」

本講演会では、多文化的な社会とはどういうものか、ドイツのトルコ系移民に焦点をあてて、人びとがどのように生きているのか描き出す。ヨーロッパの経験を参照し、日本での多民族・多文化共存について考える。

日時　2月28日（金）18時30分～20時45分（17時30分開場予定）
講演会場　オーバルホール（定員420名）
　（大阪市北区梅田3－4－5）
　東京サテライト会場（ライブ配信）
　聖心女子大学4号館／聖心グローバルプラザ3階ブリット記念ホール
　（東京都渋谷区広尾4－2－24）
講演　森明子（本館 教授）
　石川真作（東北学院大学 教授）
パネルディスカッション
参加者　森明子（本館 教授）
　石川真作（東北学院大学 教授）
　高谷幸（大阪大学大学院 准教授）
司会　相島葉月（本館 准教授）
主催　国立民族学博物館、毎日新聞社
協力　聖心女子大学
※要事前申込（オーバルホールのみ）、参加無料、先着順、手話通訳あり

お問い合わせ先
研究協力課 研究協力係
06・6878・8209

お問い合わせ（本館 広報係）
電話　06-6878-8560／FAX　06-6875-0401
http://www.minpaku.ac.jp/

みんぱくゼミナール

日時　1月18日（土）13時30分～15時（開場13時）
会場　本館セミナー室
※申込不要、参加無料
※参加券を12時30分からインフォメーション前（本館1階）にて配布します。
※メイン会場が満席の場合は中継会場をご案内します。

第499回
イタリアにおける人と食のかかわり
講師　宇田川妙子（本館 教授）

食はどの社会でも文化の一部ですが、イタリアではその結びつきが強く、人びとは自分たちの食に高い関心とプライドを持ち、スローフード運動など、食に関する活動も活発です。そうしたイタリアにおける食の現状をさまざまな角度から紹介します。

ローマの青空市場（2017年）

みんぱくウィークエンド・サロン
研究者と話そう

本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」「調査している地域／国の最新情報」「みんぱくの展示資料」について分かりやすくお話しします。

1月12日（日）14時30分～15時　本館ナビひろば
カワウの雛を同時に孵化させる技術
話者　卯田宗平（本館 准教授）

1月19日（日）14時30分～15時　本館ナビひろば
聖者になる過程——カザフのイスラームと近代
話者　藤本透子（本館 准教授）

※申込不要、参加無料（要展示観覧券）

●年始の開館のお知らせ
年始は1月5日（日）から開館します。

※各イベントについてくわしくは、みんぱくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時（土日祝を除く）です。

刊行物紹介

■山中 由里子、山田 仁史 編
『この世のキワ〈自然〉の内と外』
勉誠出版　3,200円（税別）

「驚異」と「怪異」の表象を、ユーラシア大陸の東西の伝承・史料・民族資料・美術品に探り、「自然」と「超自然」の境界領域、「この世」と「あの世」の心理的・物理的距離感、境界に立ち現れる身体・音・モノなどについて、総勢25名の執筆者が学際的に考察する。特別展「驚異と怪異——想像界の生きものたち」の副読本です。

■鈴木 紀ほか 編
『古代アメリカの比較文明論——メソアメリカとアンデスの過去から現代まで』
京都大学学術出版会　4,200円（税別）

本書は、科学研究費助成事業・新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」（2014年から2018年）の成果である。メソアメリカとアンデスの考古学的研究、古環境に関する自然科学的研究、および植民地時代以降のラテンアメリカに関する歴史学、人類学、博物館学的研究など28の論文、10のコラムと総括から成る。

友の会

国立民族学博物館友の会　電話 06-6877-8893（9時～17時、土日祝を除く）　FAX 06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/　E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会講演会

会場　本館第5セミナー室（当日先着順・定員96名）
※会員無料（会員証提示）、一般500円

第496回　1月11日（土）13時30分～14時40分
中国に生きるムスリムたち
講師　奈良雅史（本館 准教授）

中国には約2000万人のムスリムが暮らしており、その約半数を回族とよばれる人びとが占めています。彼らはおもに唐代から元代にかけて中国にやってきた外来ムスリムとイスラームに改宗した漢人との通婚を通して形成された民族集団とされており、中国全土で漢人と隣り合いながら暮らしてきました。本講演では、回族の歴史と文化について紹介したうえで、宗教教育を事例に彼らが中国共産党政権下でいかにイスラーム信仰を続けているのかを考えます。

※講演会終了後、講師を囲んで懇談会をおこないます（40分）。

第497回　2月1日（土）13時30分～14時40分
【コレクション展示「朝枝利男の見たガラパゴス——1930年代の博物学調査と展示」関連】
博物学者 朝枝利男の生涯を追う
講師　丹羽典生（本館 准教授）

戦前の博物学者 朝枝利男の生涯について、これまでの調査からわかってきたことを紹介します。日本における修行時代の姿からアメリカへの留学、そして探検隊としての活躍など、朝枝本人が残した多くの文章、写真や絵画を整理しながら考えていきます。彼は裏方的な仕事をしていたため忘れられがちであるものの、幅広い人脈のなかにいたこと、ガラパゴスからソロモン諸島まで貴重な資料を生み出してきたことがわかります。

※講演会終了後、コレクション展示の見学会をおこないます（40分／要会員証もしくは展示観覧券）。

東京講演会

会場　モンベル御徒町店4Fサロン
（事前申込先着順・定員60名）
※会員無料（会員証提示）、一般500円

第128回　1月25日（土）13時30分～14時40分
消滅の危機に瀕した言語
講師　吉岡乾（本館 准教授）

想像界の生物相

チベットの占術ダイアグラム

駿河台大学准教授　村上 大輔

資料名｜占術ダイアグラム
標本番号｜H0205668
地域｜モンゴル
サイズ｜縦62cm×横66cm

＊撮影：大道雪代

「チベットの占術ダイアグラム」と名付けられた魅惑的な絵画がある。曼荼羅のようにグリッド状に仕切られていながら、得体のしれないものが乱舞している不思議な絵画である。この絵画にはいったい何が描かれているのだろうか。

◆◆◆十二支の組み合わせ◆◆◆

まず目に入ってくるのは真んなかの大きな怪物である。これは古代中国において大地を支える神獣とされた亀であり、斑点模様の体を纏い、腹部をこちら側に向けている。その腹部はデフォルメされ正方形となっているが、その外縁部には龍、蛇、馬などの十二支が描かれている。一方、絵画の上端と右端に小さなマスが連なっているが、ここにも十二支の神獣が描かれている。それもなぜか下半身は蛇（龍）のようになっているから面白い。左上から子丑寅と始まり、右下端まで計六〇マス描かれているのは、宇宙の元素である五行（木・火・土・金・水）が各々の干支に割り当てられているからである。

左上部分の拡大。左から子丑寅卯辰巳の干支。下部の三列はそれぞれの干支に配された九宮の数字

「九宮」とよばれる概念がこの表をさらに複雑にしている。六〇とおりある干支と五行のそれぞれの組み合わせには、一から九の数字のうち三種類の数が割り当てられており（例えば、木の子年には一、四、七）、この絵画には計一八〇年分の十二支・五行・九宮の組み合わせが網羅されているのだ。チベットの占星術においては、干支や五行だけではなく、生まれ年の九宮の数字が重要な要素になっており、このダイアグラムを見れば即座にその数字を同定できるようになっている。

◆◆◆吉凶を占う◆◆◆

再び亀の腹部の中央部に視線を移す。そこにはまるで密教の金剛界曼荼羅のような円と正方形の幾何学文様が見える。それらは九宮の占いの計算に使われる数列であるが、方位占いで用いる八卦の文様とそのダイアグラムも描かれている。占われる人間の八卦の種類を性別と年齢で割り出し、それを東西南北など八方向それぞれに配された八卦の種類と組み合わせることにより、当人のその年における方向の吉凶を平易に同定できるようになっている。

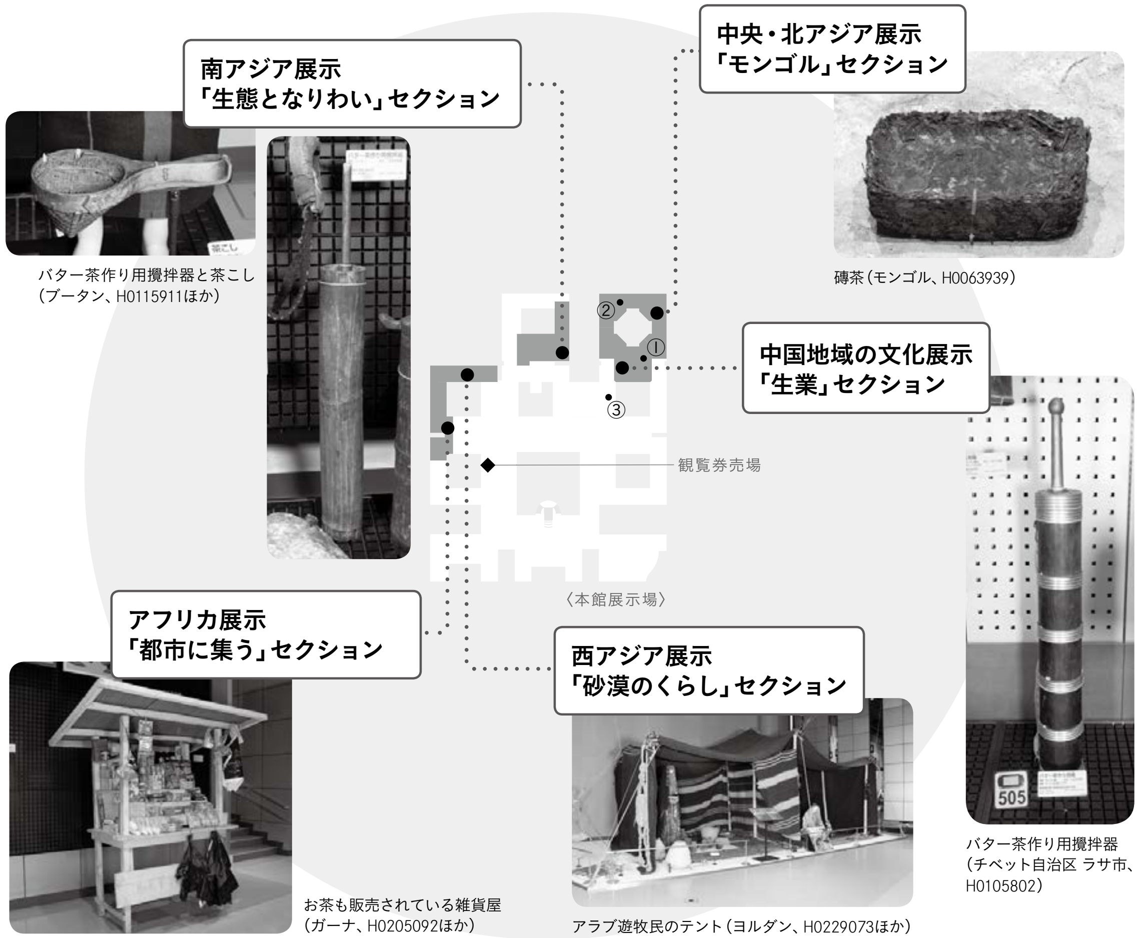
亀の周囲にところ狭しと描かれたものは、トルコ石やサンゴなどの宝石や羊肉、金剛杵など財産や力を示すような図柄のほか、虎が死体を食べているものや犬が人頭をくわえているもの、そして魔牛が死体を運んでいる図といった不吉なものが多々見られる。なかには僧侶の悪霊や、「魔の屠殺人」、「狂った女」といったものまで描かれている。これらは方位占いにおいて、出くわす可能性のある可視不可視の吉凶を具体的に描いたものだと考えられる。

チベット・モンゴルの大草原。遊牧民のテントのなかで、巡礼中のラマが同じく巡礼をしている俗人に占いを乞われる。ラマは折り畳まれたこの絵画を懐から取り出し、静かに地面に広げる。すると即座に、そして威厳をもって、相手に吉凶を言い渡す。そのラマはこの占術ダイアグラムの合理性とグラフィックな物語性によって、「神がかり」ともいえるそんな離れ業をやってのけていたであろう。そんな想像が湧いてくる。

※本稿は『驚異と怪異――想像界の生きものたち』に掲載されたコラムに加筆・修正したものです。

茶の旅

民博 超域フィールド科学研究部　韓敏



バター茶作り用攪拌器と茶こし（ブータン、H0115911ほか）
磚茶（モンゴル、H0063939）
バター茶作り用攪拌器（チベット自治区 ラサ市、H0105802）
お茶も販売されている雑貨屋（ガーナ、H0205092ほか）
アラブ遊牧民のテント（ヨルダン、H0229073ほか）

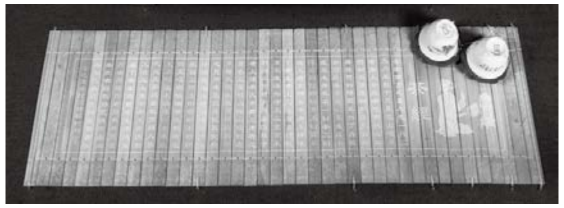
酒、コーヒー、たばこと並ぶ四大嗜好品のひとつである茶は、人びとの暮らしに潤いを与え、もてなしやさまざまな儀式に欠かせない、実用的かつ象徴的な飲み物として重宝されてきた。本館の展示を一周すれば、茶の育んできた世界各地の文化やそのつながりを感じることができる。

茶の産地とその飲み方

茶の発祥地の中国では、約三〇〇〇年前に茶の栽培が始まり、当初は薬用の食べ物とされていたが、やがて飲用の飲み物になっていった。現在、産地は雲南、福建、湖南、浙江、安徽など一九の省（区）に分布し、北緯一八～三八度、東経九八～一二二度の線にかこまれている。そのうちの一二の地域が、唐代にはすでに産地として知られていた。

唐代半ばから茶は全国的な飲み物になり、文筆家の陸羽（七三三～八〇四年）は、茶の起源、栽培、加工および飲み方をまとめた、世界初の茶に関する著書『茶経』三巻などを著述した。以降、茶は嗜好品としての地位を確立していった。交易も盛んにおこなわれるようになり、江南、四川の茶と北西辺境地帯の馬による、いわゆる「茶馬」の交易が唐代から始められたとされる。

中国の多くの地域では蓋付きの茶碗に茶葉を入れて、湯を注いで飲むのだが、チベットでは磚茶を砕いて大鍋で煮出し、その茶汁にバターや塩を加え、攪拌器のなかで混ぜて飲むのが一般的である。磚茶は、緑茶、紅茶などを蒸して、煉瓦状に押し固めて乾燥したものであり、モンゴルやシベリアなどでも愛飲される。モンゴルでは馬乳などを入れて飲むことが多い。


「茶聖」、「茶神」と崇められた陸羽の『茶経』が書かれた茶席の敷物（中国、H0274354ほか、右頁の図中①）

茶ともてなし

茶は個人や家族が楽しむ嗜好品としてだけではなく、遠方からきた客の喉の渇きを癒し、くつろいでいただくという、おもてなしとしても使用されてきた。特に、水が貴重である砂漠地域では、まったく見ず知らずの者に対しても、食べ物や茶を惜しまずにもてなすのが礼儀であり、またそれがその人の徳の高さ、寛大さの指標ともなる。アラブ遊牧民のベドウィンのテントをたずねると、まずシャーイとよばれる紅茶がふるまわれ、数回おかわりをするのが常識とされる。砂漠という自然のなかで家畜を連れて移動し、他者との共生を大事にするベドウィン社会において、茶のもてなしは客を迎えた側の気前のよさを示す場になっている。

儀式のなかの茶

茶は日常生活のほかに、さまざまな儀式においても象徴的な飲み物としても使用されている。カザフスタンでは、婚礼をおこなう際に酒、お菓子と一緒に、新郎側と新婦側のあいだであらたな関係性を結ぶものとして贈答されている。また中国では、あの世の故人にとっても欠かせない飲み物とされ、死者を供養する際の副葬品として茶器セットが供えられる。

朝鮮半島でも、旧暦の元日と八月一五日に「茶礼」という祖先祭祀が家ごとにおこなわれている。茶を使用した茶礼は高麗時代に普及したが、儒教を国教とした李氏朝鮮時代、仏教儀礼であるとして禁じられた。以降は酒を供える「祭祀」へと変わったが、名称は現在も「茶礼」のままである。

歴史を動かしたグローバルな嗜好品

現在、茶は一六〇あまりの国や地域で飲まれているグローバルな嗜好品となっている。生産国や地域も五〇あまりに上り、二〇世紀から紅茶の生産を始めたケニアは、今や世界第三位の生産国として知られるほど盛んである。それぞれの地域や国では、独自の茶の楽しみ方が生まれた。ブータンやネパールの山岳地域では、鍋で煮出した磚茶に塩、バターとミルクを加え、攪拌したバター茶が愛飲されている。同じ紅茶でも、イスラエルでは、ミント、ドライフルーツ、バラなどを入れて飲まれているが、イギリスでは牛乳や砂糖を入れるミルクティーが好まれている。一八世紀にイギリスで確立されたこの飲み方は、イギリスの茶の消費量の増加と東インド会社の中国貿易の拡大、のちのアヘン戦争の勃発につながった。このように世界的に茶の需要が高まり、西インド諸島では世界商品として砂糖の生産が盛んになった。大西洋横断の奴隷貿易はサトウキビ畑に多くの労働力を投入した。茶は各地で豊かな文化を育んだと同時に、世界の歴史を動かすグローバルヒストリーも具現化したといえよう。

円卓を囲んで家族団らんの時間を過ごすカザフ人。女性がサモワールで湯を沸かしてミルクティーをいれ、男性が弦楽器ドンブラをかき鳴らしている（カザフスタン、H0277648ほか、右頁の図中②）

祖先祭祀に欠かせない祭祀床（チェササン）。茶礼床ともいう。先祖に供える料理が並べられる（韓国、H0139988ほか、右頁の図中③）

シネ倶楽部

「パッドマン ── 5億人の女性を救った男」

原題：Padman

2018年／インド／ヒンディー語／140分／DVD（日本語）あり
監督：R・バールキ
出演：アクシャイ・クマール、ソーナム・カプールほか

月経のタブーに挑む、心優しきヒーロー

松尾瑞穂
民博 超域フィールド科学研究部

映画は次のようなナレーションから始まる。「アメリカにはスーパーマンがいる、バットマンがいる、スパイダーマンがいる。でもインドには……パッドマンがいる」。そう、この映画は、バットマンならぬ「パッドマン」として、月経のタブーに挑み、女性を救おうとした市井のヒーローの話である。

ことの始まりは、新婚の主人公ラクシュミの妻が、ある晩、一人ベランダで寝ると言い出したことだ。いぶかしがり理由を聞く夫に対し、若妻はしぶしぶと月経中であることを認める。無骨で心優しいラクシュミには、その行動がまったく理解できない。しかし、妻は月経がケガレであること、それゆえ隔離されなければならないことを告げる。さらにラクシュミは、女性たちが月経中に古布を用いて、誰にも見られないよう洗って繰り返し使用していることを知る。こんな汚い古い布を使って、病気にでもなったらどうするのか、二一世紀だというのにまだそんなことにとらわれているのか……。結婚して初めて女性が毎月どんな大変な思いをしているのかを知ったラクシュミは衝撃を覚えるが、妻はそういうものなのだと諭す。市販の生理用品は高く、裕福ではない家ではそうそう買えるものではない。そこで、ラクシュミは決意する。妻が安心して使える安価で清潔な生理用品を自分の手で作ることを。そこから、主人公の孤独な闘いが始まる。

公衆トイレに設置された使用済みパッド処理機。入れると焼却処理をする（マハーラーシュトラ州、2019年）

突然夫が月経にとりつかれ、女性用パンツに生理用品をつけて血が漏れないかどうかの実験などをし始めるのだから、家族の驚きや嘆きといったらない。妻からも家族からも近隣の人びとからも変人として見放されたラクシュミは、四面楚歌の状態に置かれてしまう。ラクシュミの闘いは、誰からも理解されない。結局、彼はたった一人で、生理用品製造機械を作り上げ、何年もかかってようやく納得のいく生理用品を作ることに成功する。だが、そこに至るまでの道のりのなんと険しかったことか。

インド社会のタブー

ラクシュミの置かれた立場を理解するには、インド社会における月経のタブーについて理解しなければならないだろう。ヒンドゥー教徒にとって、出産や死、そして月経はケガレの一種である。月経中の女性は、寺院への参拝や儀礼への参加などの宗教的行為は禁止され、厳格な地域では食事や睡眠も家族とは別におこない、なるべく人との接触を避けるようにして過ごす。わたしが調査している村では、かつて月経中の女性は現地語で「隅に座る」とよばれる隔離をおこなっていた。文字どおり、女性の空間である台所から離れ、家屋の隅っこに座って過ごすのである。五日目に月経が終わると沐浴し、髪を洗い、ケガレを落とす。そして、汚れた衣服を洗う。当然、人前で月経について話すこともタブーである。

映画のような、社会起業家が始めた小規模な生理用品製造工場（プネー、2019年）

村から街のカレッジに通う少女たちが増えるに伴い、厳格な意味での「隅に座る」という慣習は、今では若い世代のあいだではほぼ見られなくなっている。しかし、月経時に宗教儀礼に参加する女性はいまだ少ない。それはやはり、タブーを破ることへの怖れが消えないからである。女性たちは、儀式や祭礼の予定があるときには、経口ピルを飲んで月経を遅らせることもある。つまり、月経のタブーが変わるのではなく、医薬品を用いてでもコントロールするという逆説が生まれているわけである。

あらたな試み

今日では、教育の現場で月経のしくみについて学び、伝統的な因習を打ち破ろうとする試みがNGOなどによっておこなわれている。また、生物学の授業でも、排卵から受精に至る一連のプロセスを学びつつ、セクシュアリティ教育までも含むような試みがおこなわれている。同時に、学校の女子トイレといった施設面での整備や、生理用品の提供なども欠かせない。月経中の女子学生にとって、学校のトイレで清潔な水が手に入るのか、生理用品が交換できるのか、ということは通学にもかかわる重要な問題なのである。

ラクシュミは、妻を幸せにしたいという一念で、生理用品を開発した。女性たちは、自分たちでもそれを作り、小分けして売るというビジネスを始める。それは小さなパッドに過ぎないが、女性のエンパワーメントにつながる、確かな一歩だったのである。なお、この映画は実話に基づいており、モデルとなったムルガナンダム氏は、世界中で講演をおこないながら、今でも南インドの村でナプキン製造工場を営んでいるという。

NGOが制作したワークショップ用エプロン。女性の身体について学ぶことができる（プネー、2018年）

ことばの迷い道

ゴム時間の危機

小野 林太郎
民博 人類文明誌研究部

「ジャム・カレット」というインドネシア語を聞いたことがあるだろうか？　インドネシアをこよなく愛する「インドネシアフリーク」の方々であれば、インドネシア語にちなむ話題のひとつにしたことのある方も多いと思う。そんなわけでわたしもこのコラム記事を依頼されたとき、ある意味でコテコテのネタともいえるこのことばを話題にするのは、ちょっと躊躇した。しかし、このような素敵なコラムでもない限り、「ジャム・カレット」について書けるチャンスはもうなかろうと考え直し、臆面もなく取り上げることにした次第である。

じつは理由はもうひとつある。タイトルにもあるように、この「ジャム・カレット」ということばが、今やインドネシアで危機に瀕しているのではないか、とわたしは勝手ながら案じているのだ。

さてこのインドネシア語の意味だが、「ジャム」は時間、「カレット」はゴムを意味する。よって直訳すると「ゴム時間」となる。ここでピンと来た人は素晴らしい。きっとインドネシア人と何かを共有できる持ち主であること間違いない。

ヒントはゴムのもつ性質にある。ゴムといえば、タイヤの素材や輪ゴムとして日本人にもなじみある物質で、ゴムノキの樹液を原料として製品化される。インドネシアはオランダ統治下にあった植民地時代より、このゴムの世界的な生産地として知られ、現在でも天然ゴムの生産国トップ3に入っている。そんなお国柄もあり、こんなことばが生まれたのだと思うが、ゴムというのは「伸び縮み」する。ここまで説明すれば、何となく読めてきたぞ、という方が多数を占めるのではないだろうか。

そう、つまり「ゴム時間」とは「時間は伸び縮みするもんだ」という意味で、インドネシアの場合は特に「伸びる」方に力点が置かれる。

わたし自身の経験を踏まえても、インドネシアでは何かと「待たされる」ことが多い。いや、正確に言うと多かった。時間どおりに何かが始まるということも、定刻どおりに船や電車、飛行機が出発することなどもほぼあり得なかった。そんなときに「ジャム・カレットだから仕方ない」と言えば、まあそうだよなと皆で納得し、あとはおしゃべりしたり、寝たりして気長に待つというのがインドネシアの日常茶飯事的にみられる光景だった。慣れてしまうと（というか諦めると）、それほど苦にならないのが不思議で、逆にイライラがなくなり、心の平安が訪れ、人間の生活はこうあるべきではないのか、とさえ思うようになる（多分）。少なくともわたしはそう感じ、「ジャム・カレット」という表現のなかに、インドネシア人の奥深い知恵や哲学の真髄を感じ、尊敬の念すら込めて使ってきた。

ところが近年、このことばが危機に瀕している気がしてならない。定刻どおりに物事が進むことが以前よりも増えつつある。待ち合わせなど、むしろ相手が待っていることの方が増えてきた。インドネシア人社会に何か大きな変化が起こりつつあるのだ。わたし自身は、こうした変化はスマホの普及とも連動しているのではという勝手な印象をもっている。とはいえ、インドネシア人がゴム時間への理解や愛着を失った訳でもなく、このことばを使う機会は減りつつも、まだまだ健在だ。ここは焦らず、ゴム時間の思考で今後の成り行きを見守っていきたい。

月刊みんぱく 2020 1月号

編集後記

例年1月号の特集ではその年の干支を取りあげてきた。だが3年前に一巡してしまい、一昨年は苦しまぎれ（？）の猫で、昨年はそれらしく凧だった。今年は正月気分にふさわしい世界の縁起モノとした。なかに「子や家族の幸せを願う想いは今もむかしも同じ」とあるが、古今東西共通の願いだろう。だとすると、縁起モノにも共通性がありそうだが、意外と違いも少なくない。それも並べて読むから気づくのであり、通文化の比較は今なお民族学ないし文化人類学の魅力のひとつだと思い知らされる。その意味で昨年11月、大盛況のうちに閉幕した特別展「驚異と怪異」と3年前の特別展「ビーズ」は、並べて見る通文化研究の醍醐味を実感させてくれる展示だった。

本誌2019年11月号「シネ倶楽部M」の写真キャプションに関して読者から問い合わせがあった。鍬が裏返っており、田を耕しているのではなく脱穀作業ではないかというものだ。筆者はすぐに現地に尋ね、大きな土の塊を砕く耕起作業のひとつであり、キャプションに間違いはないと確認してくれた。丁寧に見て問い合わせをしてくださった読者に、また敏速に対応してくれた筆者にお礼を申し上げたい。本誌にはかつて「読者のページ」というコーナーがあったが、現在はない。とはいえ誌面は読者に育てられる。質問やご意見などをお寄せいただければありがたい。

（南真木人）

●表紙：花輪が捧げられたラフィング・ブッダ
（撮影：福内千絵、南インド・ティルパトゥル、2017年）

次号の予告

特集

「朝枝利男とガラパゴス」（仮）

みんぱくをもっと楽しみたい方のために

国立民族学博物館友の会のご案内

友の会は、みんぱくの活動を支援し、博物館を楽しく積極的に活用するためにつくられました。
毎月『月刊みんぱく』をお届けするほか、さまざまなサービスをご用意しております。

維持会員・正会員

『月刊みんぱく』の送付／友の会機関誌『季刊民族学』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加／研究者同行の国内外研修旅行への参加　など

ミュージアム会員

『月刊みんぱく』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加　など

繰り返し入館できる**みんぱくフリーパス**や、学校・学部単位で利用できる**キャンパスメンバーズ**など各種会員種別もございます。目的にあわせてご利用ください。

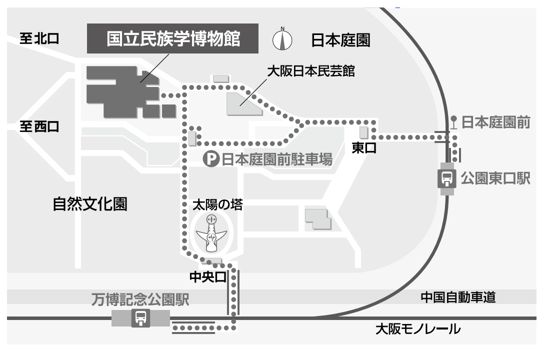
詳細は、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話 06－6877－8893／平日9:00～17:00）

月刊みんぱく　2020年1月号
第44巻第1号通巻第508号　2020年1月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話　06-6876-2151

発行人　園田直子
編集委員　南真木人（編集長）　上羽陽子　齋藤晃
菅瀬晶子　三島禎子　吉岡乾
デザイン　宮谷一款　長岡綾子
制作・協力　一般財団法人 千里文化財団
印刷　能登印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
●阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
●乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある当館専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ　http://www.minpaku.ac.jp/
みんぱくフェイスブック　https://www.facebook.com/MINPAKU.official
みんぱくツイッター　https://twitter.com/MINPAKUofficial
みんぱくインスタグラム　https://www.instagram.com/MINPAKUofficial/
みんぱくYouTube　https://www.youtube.com/user/MINPAKUofficial

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology